

ドイツにおけるトルコ系移民の音楽伝承にかかわる調査報告

——ドルトムントとベルリンを例に——

濱 崎 友 絵

キーワード：トルコ系移民 ドイツ 音楽伝承 トルコ民俗音楽 音楽実践

1. はじめに

第二次世界大戦後、戦後復興を担う労働力としてドイツに受け入れられたトルコ系移民は、今やドイツ総人口の約2%（150万人）を占めるドイツ最大のエスニック・マイノリティとなった。ベルリンをはじめ各地にはトルコ・コロニーが形成され、トルコ語やトルコ音楽が日常化する移民空間が生み出されている。音楽領域においては、2000年代にドイツにおいて誕生したR&B（後述）といった新しい音楽ジャンルがドイツ社会に大きなインパクトをもたらすなど、ホスト社会やグローバリゼーションの潮流、さらに父祖の地トルコの人的あるいはメディア・ネットワークと結びつきながら複層的な文脈で形づくられてきた。

一方、同じ「トルコ音楽」でありながら、オスマン音楽やトルコ民俗音楽などの「伝統音楽」は、ベルリンをはじめドイツ各地の音楽組織や、宗教的、文化的社会的自助組織であるデルネッキ（協会）などで保護、教授されている状況にある。近年の音楽学の領域は、グローバルメディアによる多様な文化・音楽混交に目を向けがちであったが、一方で、これとは対極の「人と人との接触」による音楽実践がドイツ国内の多くのトルコ音楽教授組織で展開されている。そしてこここそ、支配的なシステムに受動的に収斂されずに自発的に「自らの音楽」を伝え、維持しようとする人々の現在のディアスポラが抱える伝統／再編の問題が集約されているともいえる。1960年代以降、現在までトルコ系移民の第一世代から第四世代に至るトルコ系移民の人々が地理的・文化的・政治的境界を超えて、自分たちの文化や音楽を伝えてきたとすれば、「ドイツにおけるトルコ音楽の伝承」という語りの中には、「トルコ／ドイツ」という単純な二元論では包摂しきれない記憶や経験、試行や葛藤の実相があるはずである。さまざまな背景をもつトルコ系移民の人々が時と場所を共有し、音楽を奏で、それを「伝える」という実践そのものには、個々人が衝突し、交渉する社会空間の中での一種の「闘争」があったとみることも可能であろう。

ではドイツ社会においてトルコ系移民の人々は、自分たちの音楽をいかに捉え、どのように習得し伝えようとしているのか。そしてまた、これはどのような外的要因によって支えられ、トルコ・コミュニティあるいはドイツ社会の中で意味づけされているのか。本報告は、これらの一連の問いに向き合うための前提となる歴史的、社会的、音楽的経緯を整理し、その上で現地調査（2017年10月末～11月および2018年9月）での音楽実践、とくにトルコ民俗音楽の伝承実態を報告し、そこから浮き上がる問題点を抽出することを主眼とするものである。

2. ドイツにおけるトルコ系移民

——1960年代から2000年代に至る社会的、音楽的変遷——

2-1 社会的変遷

ドイツにおける「移民」の定義は、「1949年以降に現在のドイツ連邦共和国の地域に転入した人々、ならびに、すべてのドイツ生まれの外国人、および、転入したかもしくはドイツで外国人として生まれた少なくともひとりの親をもって、ドイツで生まれたすべての人」とされる¹。1950年代以降、第二次世界大戦の戦後復興を担う労働力として西ドイツに流入した外国人は、「ガストアルバイター（訪問労働者）」と呼ばれ、ドイツの「奇跡の経済復興」²を支えていった。しかし彼らは当初から「ドイツ国民」としてドイツ社会に組み込まれていった訳ではない。そもそもこうした外国人の多くは、ドイツ人労働者が敬遠するような比較的 low賃金の単純労働をになう「一時的労働者」とみなされており、なおかつ「ドイツ民族 Deutsches Volk」という血統主義を国家建設の原理を前に³、「外国人／他者」として厳然と区別をされてきた。そしてこれが後に「並行社会」と呼ばれる移民の社会文化的セグレグレーションを生み出す因縁となったとされる⁴。

社会制度や文化的側面など、さまざまな問題を抱えながらも現在のドイツは、EU域内ではフランスやオランダとも並ぶ「移民大国」となっている。現在、ドイツ連邦統計局によるとドイツの全人口は約8,280万人で、そのうち「移民の背景をもつ住人」は1,930万人となっており⁵、人口の約四分の一を移民が占める。さらに「移民の背景をもつ住人」のうちトルコ系移民は約150万人で⁶、ポーランドなど東欧諸国からの移民を凌いでドイツ人口全体の約2%まで達する割合となっている。現在、ベルリンなどトルコ系移民が集中する地域ではトルコ料理屋が立ち並び、トルコ語が飛び交うトルコ・コロニーが出現しているが、これはまさに彼らの存在がつねに可視化されつつドイツ社会の中に組み込まれていることの証左であるといえよう。

トルコ系移民が現在のようにドイツ最大のマイノリティとなる端緒は、1950年代から70年代にかけて西ドイツが外国人労働者受け入れに積極的な政策を展開したことにも起因するが、同時にトルコの内政的な事情も関係していた。トルコでは、大統領アタテュルクが率いてきた共和人民党が1950年に民主党へと政権交代したことを契機に、自由経済政策、道路建設、農業重視などの改革が打ち出され経済成長率が増加するが、1950年代後半には経済成長

¹ 石川真作『ドイツ在住トルコ移民の文化と地域社会』立教大学出版会、2012年、1～2頁。

² Gamze Avcı, “Comparing Integration Policies and Outcomes: Turks in the Netherlands and Germany,” in *Turkish Immigrants in the European Union*, edited by Refik Erzan and Kemal Kirişçi, Routledge, 2009, p. 64. なお、この時のドイツの政策は「ローテーション政策」とも呼ばれ、外国人労働者の滞在を2～3年の短期間で「ローテーション」していくことが想定されていた。石川、前掲書、4頁。

³ ドイツでは1990年代初頭まで、国籍法が純粋な血統主義を基礎原理として運用されていた。同前、3頁。

⁴ 石川、前掲書、60～62頁。

⁵ <https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/GesellschaftStaat/Bevoelkerung/Bevoelkerung.html>（2018年10月31日閲覧）

⁶ <https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/GesellschaftStaat/Bevoelkerung/MigrationIntegration/MigrationIntegration.html>（2018年10月31日閲覧）

にもかげりが見えはじめ、1960年以降、クーデターと政権交代が交互に押し寄せトルコは経済発展と危機、それにとまなう政局不安をくり返すことになる。加えてトルコ国内の近代化の状況は都市部と農村部で歴然としており、それはトルコの村落のうち1953年の段階で電気が通っていたのが、わずか十ヶ村であったと言われていたことからもうかがい知ることができる⁷。1960年代に入り、次第に押し寄せる近代化、機械化の波は、小作農で生活を営む農民は職を奪いはじめ、その地位を追われた多くの人々は、アンカラやイスタンブルなどの都市へと職を求めて押し寄せていった⁸。こうした状況でトルコ政府は、トルコ国内の失業率の高まりに対処すべく1961年に西ドイツと雇用双務協定を締結し、失業問題の解決や移民の送金による赤字貿易の軽減を目論んだ⁹。当該期、トルコ人のドイツへの移住者数をみると、1950年の段階では、わずか1,300名ほどであったが、1961年には約6,700名、十年後の1971年には652,800名にまで急激に増加している¹⁰。また付言すれば、ドイツへ渡った彼らの多くが、イスタンブル、アンカラ、イズミルといったトルコの都市部出身が多かった一方、黒海地方のトラブゾンやトルコ東部のカイセリといった地方出身もかなりの数にのぼっていたことが資料からわかっている¹¹。つまり1950年代から1970年代にかけてのトルコでは、政情不安、都市と地方の格差、近代化と失業率の高まりにより、国内移民と国外移民の急激な流れが生み出されていたのであり、ドイツへの移住はこのような文脈の中で生じていった、時代の圧力による動的な連鎖の結果でもあったとみることができる。

1960年代にドイツへ渡った第一世代のトルコ人たちの境遇の一端は、同年代にドイツの自動車会社フォードで労働に従事した、カイセリ出身のアーシュク（吟遊詩人）、メティン・トゥルクオズ Metin Türköz の《アラマンヤ、アラマンヤ Alamanya Alamanya》の歌詞からもうかがい知ることができる。

工場で一枚の契約書が渡された
働く場所はドイツだと告げられた
カバン一つ、チケット一枚、さあ向かえと
茹でた豚を初めて食べさせられた、ミュンヘンで

⁷ 新井政美『トルコ近代史』 東京：みすず書房、2001年、234頁。

⁸ 1950年代後半から、こうして都市部へ流れ込んだ人々は、定職につくこともままならないまま都市部周縁の山の斜面などに「ゲジェコンドウ」（一夜建て）と呼ばれるバラックを建て、住み着いていくことになる。

⁹ さらにヨーロッパでトルコ人が先進的な技術を身につけ、帰国後に国内産業に還元することも期待されていた。八木麻里「トルコのEU加盟はなぜ実現しないのか」内藤正典編『トルコから世界へ』明石書店、1998年、177頁。

¹⁰ Martin Greve, *Almanya'daki "Hayali Türkiye"nin Müziği*, İstanbul: İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları, 2006, p. 35.

¹¹ 1964年に実施されたトルコ政府主導のアンケート調査『西ドイツにおけるトルコ労働者』では、ドイツ各地のトルコ労働者に125の質問から成るアンケートが送付され、有効回答494名分の結果をまとめられた。出生地、教育的背景、余暇の過ごし方、祖国に対する思いなど、全230頁（付録は除く）にわたって報告されている。出生地に関して人数がもっとも多かったのが、イスタンブルの86名（17.4%）で、続いてトラブゾンが34名（6.9%）、カイセリが18名（3.6%）、ゾングルダックが14名（2.8%）と続いている。Nermin Abadan, *Batı Almanya'daki Türk İşçileri*, Ankara: T. C. Başbakanlık Devlet Planlama Teşkilatı, 1964, p. 7.

アラマンヤ、アラマンヤ、トルコ人のような労働者はいないだろ
アラマンヤ、アラマンヤ、自分たちより従順な者はいないだろ¹²

「アラマンヤ Alamanya」とは、トルコ語の「アルマンヤ Almanya（ドイツ）」に掛けた言葉であり、見知らぬ土地、見知らぬ慣習をもつドイツに、労働者として「放り出された」トルコ人の、行き場のない不安や自虐がこめられた曲となる。歌詞には、子供と離れ離れになる「気も狂いそうな」思いや、部屋も借りられず、日々の労働に身を削る辛さが綴られており¹³、ドイツ社会での疎外感に向き合う多くのトルコ移民の境遇がここからも想像される。

こうしたトルコ人のドイツへの流入は、1973年に一つの転換期を迎えることになる。第一次石油危機によりドイツ経済が停滞し、外国人労働者の募集が停止されたことで、新たにドイツへ労働者として入国することが制限されたためだ。その結果、西ドイツの外国人労働者数は1973年をピークに減少するが、実際には長期滞在者が増加し、本国から家族をドイツに「呼び寄せる」ことで滞在者数は逆に増加する現象が起きることになる¹⁴。その後、ドイツにおけるトルコ系移民の滞在者数は80年代には1984年から85年にかけて一時減衰するものの¹⁵、1989年には約160万人、1993年には約190万人¹⁶とその数を増やし、「ドイツ最大のマイノリティ」としてドイツ社会に圧倒的な存在感をもたらしていくことになった。

2-2 音楽的変遷

上でみてきたドイツにおけるトルコ系移民の歴史的、社会的変遷は、音楽と密接に結びつき、さまざまな音楽シーンをドイツに出現させていくことになる。ここではグレーヴェによる五つの時代区分と音楽ジャンルの変遷に依拠しながら、その展開の概要を整理しておきたい（表1）¹⁷。

（表1）

時期	トルコ系移民の動向	支持された音楽ジャンル
1961年まで	前史	ヨーロッパ芸術音楽
1961-1973	移民流入期	アナトリアの民俗音楽 「移住者」の歌
1973以降	家族呼び寄せ期	ポピュラー音楽、とくにアラベスク
1980年代	定住期	政治的な内容をもつ歌 トルコ芸術音楽（オスマン音楽）
1990年代	移民第三世代	ポップ・ミュージック、ヒップホップ

¹² Ibid., p. 38.

¹³ Mehmet Aktif Korkmaz, “Almanya’da Bir Aşık Kayserili Metin Türköz,” in *Şehir şehrin Yüzleri*, 2018, p. 82.

¹⁴ 石川, 前掲書, 39~40頁。

¹⁵ 1983年にドイツは帰国推進法を発動し、外国人労働者とその家族の帰国を報奨金をもって推進しようとした。しかしその数は約25万人で、全体の5%に過ぎなかったという。石川, 前掲書, 7頁。

¹⁶ 川島慶史「引き裂かれる私——多極化する移民社会」内藤正典編『トルコから世界へ』明石書店, 1998年, 288頁。

¹⁷ Martin Greve, *op. cit.*, p. 23.

グレーヴェによれば1960年代以前は、「ヨーロッパ芸術音楽」がトルコの人々の間で受容されていたとあるが、これは1950年代にドイツとトルコが音楽学生と音楽家の交流協定を新たに結んだことにも関係している¹⁸。たとえばトルコでもっとも有名な指揮者の一人であったヒクメット・シムシェク Hikmet Şimşek も1950年代にドイツで研鑽を積んでおり、ドイツに定住していた一定数のトルコ人が西洋音楽を学んでいたことがこの表に反映されている。

1960年代から1973年（第一次石油危機による外国人労働者募集停止）に至る時代になると、いわゆる「労働者」が一気に流入し、音楽状況は一変する。当時、第一世代のトルコ移民が好んでいたとされるのがトルコ民俗音楽であり、彼らは工場の宿舎やコーヒーハウスなどで、この種の演奏に接することができた。先述した《アラマンヤ、アラマンヤ》を歌ったメティン・トゥルクオズは、当時の様子を回顧して次のように述べている。

「もとより人々が心の拠り所にできるものなど何もなかった。ラジオもない、テープもない、カセットもない…みんな音楽を恋しがっていた。ただ私は少しだけバーラマが演奏できたんだ」¹⁹

バーラマとは民謡伴奏に不可欠な洋梨型の共鳴胴をもつ三コースからなる撥弦楽器で、現在では「トルコ国民楽器」とも言われ、トルコ・アイデンティティの象徴とも位置づけられている。先述した《アラマンヤ、アラマンヤ》も、バーラマを伴奏にトルコ民俗音楽の様式を基盤にしながら新たな歌詞で歌われたものだ。ちなみに1964年当時、トルコ政府が主導して実施したドイツにおけるトルコ移民を対象とするアンケート調査（有効回答数494名）では、余暇にかんする質問項目が含まれているが、そこでは「家事、掃除」など（38名）を圧倒的に上回る形で「娯楽、音楽聴取（散歩、映画、ラジオ、テレビ、舞踊、ビアハウス、コーヒー［ハウス］など）」が選択されている（291名、全体の約60%）²⁰。上記のトゥルクオズの「ラジオもない」との証言と異なるともいえようが、いずれにせよ音楽がトルコ移民の間で重要な「心の拠り所」として受け入れられ、求められていたことに疑いはない。

同時期には、トルコ民俗音楽ともに、この音楽を基盤としつつ「移住者 Gurbetçi」が自ら歌詞を考案し、演奏するスタイルも流行することになった。その中でも、大きなインパクトを与えた曲の一つが、トルコ東部エルズルム出身のレイハーニ Reyhani の《ドイツ、辛い祖国 Almanya Acı Vatan》であろう。「三人の娘に二人の息子／誰に預けていったのだ／こんなに美しい巣［家庭］に／おまえは火をつけて［ドイツへ］行ったのだ」と、カラデニズ（黒海地方）の民謡スタイルで歌われるこの歌は、1970年代から80年代にかけて、トルコ人合唱によっても広く歌われ、知られていくことになる。

1973年からは呼び寄せ期に入り、トルコ本国から家族が続々とドイツに流入するようになると、ポピュラー音楽、とりわけアラベスクと呼ばれるジャンルが流行していった。アラベスクとは、字義的には「アラブ風」を意味し、広義にはイスラームの様式化された植物文様や抽象的な幾何学模様などの装飾全般を指すが、トルコの音楽シーンでは、1960年代後半に

¹⁸ Ibid., p. 30.

¹⁹ Ibid., p. 37.

²⁰ Nermin Abadan, *Batı Almanya'daki Türk İşçileri*, Ankara: T. C. Başbakanlık Devlet Planlama Teşkilatı, 1964, p. 170.

誕生したアラブ風のトルコ・ポピュラー音楽（歌謡）をいう。音楽的には、とりわけエジプトから流入したアラブ音楽や伝統的なオスマン音楽に備わるアラブ・ペルシア的要素、さらにインド音楽やトルコ民俗音楽の旋律やモチーフなどが混然一体となったスタイルをもつ。1960年代に誕生した当初は、歌詞に綴られる「宿命」や「辛さ（アジュ acı）」が、イスタンブルで日々の労働に身を削る地方出身の労働者階級の心情を代弁するものとして絶大な支持を得た。トルコ国内では知識階層から侮蔑され、政府によっても「排除」の対象となったこの音楽は、トルコ人とともにドイツに入り、同地でも、もっとも人気を誇るポピュラー音楽となっていく。オルハン・ゲンジェバイやイブラヒム・タトルセスらアラベスク歌手が歌いあげる、一種の「怨歌」がドイツで労働に身を捧げるトルコの人々の間に共鳴していったことがうかがえる²¹。

続く1980年代は、トルコ系移民の定住化が進んだ時代となる。上に挙げた表では、政治的な歌詞をもつ歌やトルコ芸術音楽（以下、オスマン音楽）がトルコ系移民社会の間で顕著にみられるとしているが、むしろ同時期はグレーヴェ自身が指摘するように、こうした音楽ジャンルに加え、トルコ民俗音楽や、アラベスク、西洋化したトルコのポピュラー音楽など混在した音楽シーンが展開されていたとみる方が適切であろう²²。さらに同時代において見逃せないのは、ドイツ各地でトルコ民俗音楽およびオスマン音楽を演奏する「合唱団」（斉唱による合唱）が設立されていったことである²³。1970年代から次第に増加するデルネッキ（文化、社会的自助組織）などでこうした伝統的な「トルコ音楽」の教授が積極的におこなわれていったことも、1980年代にオスマン音楽が広く受容されていった背景に関係するとみてよいだろう。

1990年代に入るとドイツ生まれのトルコ系移民の第三世代がトルコ系移民の音楽シーンを牽引することになり、ヒップ・ホップやラップが支持を得る時代に入る。そして2000年代には、前掲の表には記載がないが、先述したアラベスクとR&B（リズム＆ブルース）が融合した「R&ベスク」といった「トルコ＋西洋」の音楽スタイルが大きな支持を得ることになる。

R&ベスクは、ムハッベットことムラト・エルシェン Murat Erşen が生み出した、一つの音楽スタイルであった。2006年にリリースされた《行くもんか Ich will nicht gehn》は、「ドアは開いている／出て行くことだって出来る／でも僕は残ることを選ぶ／畜生、どこにも行くもんか！」とドイツ語で歌われ、トルコ系移民の若者世代の内面と葛藤を吐露する歌詞をもつものとなっている。この楽曲は、トルコとドイツの国旗を前にさまざまな人種や民族が集うたうミュージックビデオとともにドイツ社会に大きなインパクトをもたらし、およそ100万回のダウンロードを記録することになった。ムラット・エルシェンは、トルコ系移民の第三世代で（祖父が1960年代にドイツに移住）、自身の音楽スタイルについて次のように語っている。

²¹ アラベスクの成立と音楽的特徴については、濱崎友絵「トルコにおけるアラベスクの誕生と展開」信州大学人文科学論集第2号、平成27年3月、9～29頁。

²² Martin Greve, *Almanya'daki Hayali Türkiye'nin Müziği*, İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları, 2006, p. 48.

²³ *Ibid.*, p. 103.

「R&Besk は、R&B とアラベスクの融合で生まれたんだ。R&B が“リズム・アンド・ブルース”から生まれたのとまったく一緒だ。アラベスクはトルコで生まれ、街角でその日その日を精一杯暮らしている庶民の物語を歌にしたものだ。『高いコンサートに行くお金は無い。自分の音楽を自分で作ろう』と考えた人たちの音楽なんだ。[アラベスクは] 通りからやって来た人たちの情熱の結晶さ。僕の内面や、すべての感覚はアラベスクだ。僕の歌は情熱や、愛、別れ、辛い思いがテーマだ。僕は通りからやって来て、新しい R&B の歌を歌っているんだ」²⁴

トルコ政府によりかつて「断罪」され、現在もなお、トルコでもっとも議論を巻き起こすポピュラー音楽のジャンルとなっているアラベスクが、ドイツで生まれ育った若者世代に共鳴し、「辛いテーマ」を題材としつつドイツ社会の文脈で読み替えられていく現象は興味深い。

以上、1960年代から2000年代に至るドイツにおけるトルコ系移民をとりまく音楽状況を概観してきた。ここから理解されることは、1960年代から1980年代にかけては、トルコ語によるトルコ音楽の「オリジナル」が持ち込まれる傾向が強くなり、1990年代以降は、ドイツ語を基盤に西洋のサウンドと「トルコ」をフュージョンさせるポピュラー音楽が生み出される傾向が強くなることである。しかしこの二つの大きな流れは、時代によって転換するというよりは、並行してトルコ系移民の間に貫かれてきたとみてよいだろう。トルコ系移民の第二、第三世代は、ムハッバットの言葉に象徴されるように、「トルコ」を忘れ去るというよりはむしろ、「トルコ」を強く意識した世代であったともいえる。先述したように、彼らは血統主義を採用するドイツで生まれ育っても「ドイツ人ではなくトルコ人である」ことを自覚せざるを得ず、教育、就職、生活全般で差別的な扱いを受けてきた。その結果、「自分はどこに属するのか」という問いに直面せざるを得ず、必然的に「そこにトルコの文化や伝統を受け継がせたい親たちの願いが重なって、トルコとの眼にみえない絆が強化されていく」²⁵状況が生まれてきたのである。

ドイツにおけるトルコ系移民は、第一世代から第三世代（現在では第四世代にかかってきている）に至るまで、自身の「居場所」を見つけるためにトルコ音楽の「オリジナル」から「フュージョン」まで程度の差はあれ、その響きの中に「トルコ」を見出し、祖地と接続させてきたといえよう。

3. 三つの音楽組織の実態調査——トルコ民俗音楽を中心に

では、現在のドイツにおいて、移民第一世代から愛好されてきた、いわゆる伝統的な「トルコ音楽」はどのようにトルコ系移民の人々の間で受け継がれているのだろうか。その実態を調査するため、とくにトルコ民俗音楽に焦点を当て、以下の三つの組織、すなわちドルトムントのトルコ教育センター（Türk Eğitim Merkezi）、ベルリンのトルコ音楽のためのコンセルヴァトワール（Konservatorium für türkische musik berlin）ならびにサズ・エヴィ（Berlin Saz Evi）の計三つの組織で聞き取り調査および参与観察をおこなった（2017年10月および

²⁴ Radikal 新聞（2006年6月8日付記事）。濱崎、前掲論文、26頁。

²⁵ 川島慶史、前掲書、288頁。

2018年9月)。本節ではその結果の概要を報告，整理する（表2）。

（表2）

名称	設立年	所属人数	主たる教授内容
トルコ教育センター （ドルトムント）	1993	約350名	・トルコ文化（民俗音楽，民族舞踊，裁縫） ・西洋楽器（ピアノ，ヴァイオリン） ・言語（トルコ語／ドイツ語）
トルコ音楽のためのコン セルヴァトワール （ベルリン）	1998	約180名	・トルコ音楽（民俗音楽，オスマン音楽） ・民族舞踊 ・西洋音楽（ピアノ，ヴァイオリンなど）
サズ・エヴィ （ベルリン）	2005	約70名	・トルコ民俗音楽（とくにバーラマ）

3-1 トルコ教育センター（ドルトムント）

ドイツ西部のノルトライン＝ヴェストファーレン州に属するドルトムントは，人口およそ58万人，工業地帯として知られるルール地方の代表的な都市で，石炭と鉄鉱石を産出し，鉄鋼工業で栄えてきた歴史をもつ。ドルトムントには現在トルコ系移民が約6万5千人居住しており，彼らの第一世代はトルコ黒海地域のゾングルダクやトルコ南東部のシリア国境地帯のマルディンなどの出身者が多い²⁶。1990年代にトルコ領事館の拡張とともに，フランクフルトのトルコ文化センターや，ハノーヴァーのトルコ・エヴィといったトルコ政府関連組織での文化的活動も増加していくことになるのだが，ドルトムントのトルコ教育センターも，こうした組織の一つと位置づけられ²⁷，1993年の設立以降2017年までの24年間に，のべ3万5千人のトルコ系移民の人々に対して言語（トルコ語やドイツ語），トルコ文化の教授をおこなってきた²⁸。

トルコ教育センターは，現在，所長一名と教員四名の計五名の組織で運営されており，今回，インタビューをおこなった所長のソルマズ氏は，数学の教員でもある。任期は五年となっており，給与はトルコ政府から支払われる。なお，本調査では，現地調査直前に同センターの音楽教師が退職する事態が発生したことで音楽教授の参与観察が叶わなかったことから，ソルマズ氏のインタビューを中心に同センターでの音楽活動の実態の概要をまとめる。

教授内容

トルコ教育センターは，トルコの人々がドイツにおいても自分たちの文化を忘れないた

²⁶ トルコ教育センター所長のスプヒ・ソルマズ氏とのインタビュー（2017年10月30日）。なお1993年設立当時は，教育センターの建物は街の中心地にあったが，老朽化が進み2015年に現在の建物があるNollendorfplatzに移った。

²⁷ Martin Greve, *op.cit.*, p. 103.

²⁸ トルコ教育センター所長のソルマズ氏とのインタビュー（2017年10月30日）。この人数の真偽は不明で，少なからず誇張が含まれると考えられるが，ドルトムントを中心に居住するトルコ系移民の教育支援をおこなう中核組織として機能してきたことは間違いない。

め、トルコの文化や音楽に敬意を払い、かつドイツ社会に「統合 integration」するために活動を続けてきた組織としての位置づけをもつ。授業内容は多岐にわたり、トルコ語やドイツ語の授業をはじめ、トルコ民俗音楽、トルコ民族舞踊、演劇、ピアノやヴァイオリン（ただし開講数はさわめて少ない）、ギター、エブル（Ebru、トルコのマーブル・アート）、裁縫や刺繍の授業が開設されている。トルコ語の授業は無料で、それ以外は有料となる。また子供たちの学校の授業支援（数学やドイツ語など）といったプライベートな指導にも対応している。

音楽実践

現在、トルコ教育センターには、約350名が所属しており、そのうち約50名がドイツ語を含むドイツ文化の授業を受けており、残りの約300名が、上で示したようなトルコ文化の授業を受けている。

トルコ民俗音楽および民族舞踊にかんしては、約150名から170名が民族舞踊を学び、約30名がサズ（トルコの三弦の撥弦楽器の総称）²⁹、とくにバーラマの授業を受講している。バーラマに関しては、初級、中級など熟達度によって四つのグループに分かれ教授がおこなわれている。近年は、4月23日の「世界子どもの日」や、共和国建国日などの祝祭にあたり、トルコとドイツの融合を示すためにバーラマとギターを共演させるような機会を設けているという。

トルコ民族舞踊にかんしては、エーゲ地方の舞踊、とくにゼイベキ（鷺の動作を模してゆったりと踊られる舞踊で、トルコ共和国初代大統領アタテュルクが愛した舞踊としても知られる）の教授にとくに力を入れている。ゼイベキと同時に黒海地方のホロン（急速な変拍子のリズムをとともなう、複雑なステップを踏む舞踊）も教えており、全部で四か所から五か所の異なる地域のトルコ民族舞踊が教えられている。なお、トルコから来た教員の一人は、クルシェヒル（トルコの中央アナトリア地域）の出身ではないものの、同地の舞踊様式を勉強しサズも演奏して、これを教えているという。こうした授業の際には、トルコの慣習（挨拶の仕方）やトルコの地理などトルコ全般に色々な知識を共有しながら授業がおこなわれていく。

上記に加え、所長のソルマズ氏は、以下のようにも述べている。

「トルコではどんな地域の出身であっても、どの地域〔の民俗音楽〕に対しても気持ちを高揚させることができるし、愛好することできるという風に言われています。（略）このセンターに来る子供達の家族〔両親〕は、ドイツにより重心を置いています。そのため小さい子供達はドイツ語をととも早く覚えていきますが、トルコ語を忘れていきます。だからこそ、このセンターに連れてくる理由も、子供たちがトルコ語を忘れないように、それと同時にトルコ民謡を歌えるように、トルコ舞踊を踊れるようにと考えているのです」³⁰

²⁹ サズは小型のもの（ジュラ）から大型（ディーワーン・サズ）までサイズによって異なる名称があてがわれ、バーラマは中型のもっとも典型的なサズとなる。なお、サズというのは総称としての「楽器」を指す場合もある。

上述の言及で重要な点が二つある。一つは、「どの地域の出身であっても、どのような地域の音楽をも愛好することができる」という言葉である。トルコ民俗音楽は、地域によって異なる十三の様式があるとされ³¹、それはとくにバーラマの奏法（タウル *tavir* と呼ばれる）³²や地方の歌唱様式（アーウズ *ağız* と呼ばれる）と深く結びつき、これがいわゆる「正統性」を担保するために大きな役割を果たすとされる。トルコの人々は、個々の地域の「正統的」な様式を、デルネッキでの音楽教授や民俗音楽合唱などを通して身につけることで、どの地域の音楽も「愛好できるようになる」。つまりソルマズ氏は、ここで「トルコ人」としての一種の暗黙知についてここで言及していたことになり、かつ、それを明確に意識していることがうかがい知れる。そして今ひとつは、トルコ系移民の「親世代」が子供たちに「言葉—音楽—身体」という結びつきで「トルコ」を認識させようとしている可能性である。とりわけ150名から170名というけっして少なくない人数が同センターでトルコ民族舞踊を学んでいることは象徴的で、バーラマの受講者30名の5～8倍近い数字となっている。この理由は、いわゆる「踊る」という行為が楽器を習得するより比較的、多くの年齢層にアクセスが容易であるという点とともに、身体の同期が一種の共同体意識を醸成する点で有用であることが挙げられよう。言語だけではなく、身体を通した「トルコ文化」の共有が重視されていることは、同センターな顕著な特徴であるといつてよい。

3-2 トルコ音楽のためのコンセルヴァトワール（ベルリン）

ドイツ最大の都市ベルリンは、人口約357万人で、そのうちトルコ系移民が約10万人を占め³³、国籍別にみたベルリンの外国人集団の割合はトルコ人が最大となっている。もっとも、ベルリンはトルコ人比率が非常に高いと一般に思われているが、山本によれば、極端にその比率が高いわけでも低いわけでもないという。その理由は、90年代前半にドイツ国籍を取得したトルコ人の30～40%がベルリン在住のトルコ人で、ドイツ国内の他の都市や地域に比べて活発だったことに起因するとされる³⁴。

ドイツ国籍を取得したトルコ系移民の割合が高い、このベルリンの地に設立された音楽組織の一つが、トルコ音楽のためのコンセルヴァトワールであった。ドルトムントのトルコ教育センターと異なり、同コンセルヴァトワールは私立の組織で、ハリメ氏（現代表）がクロイツベルクに1998年に創設し現在に至っている。彼女は、1972年（第一次石油危機による外国人労働者募集停止となる1973年の一年前）、18歳の時にドイツに来た第一世代である。渡独当初は、ドイツ語も解せず工場で働いていたハリメ氏は、後にレストランや電力会社の経営にもかかわるようになり、40代半ばに「人生の最後に本当にやりたいことは何か」と自身に問いかけた結果、子供たちを育てるための学校創設にいきついたという³⁵。現在、同組織

³⁰ トルコ教育センター所長のスプヒ・ソルマズ氏とのインタビュー（2017年10月30日）。

³¹ Eliot Bates, *Music in Turkey*, Oxford: Oxford University Press, 2011, p. 17.

³² Martin Stokes, "The media and reform: The saz and elektrosaz in urban Turkish folk music," in *British Journal of Ethnomusicology*, vol. 1., 1992, p. 94.

³³ <https://www.statistik-berlin-brandenburg.de/Statistiken/inhalt-statistiken.asp>（2018年10月31日閲覧）

³⁴ 山本健児「ベルリン在住トルコ人の日常生活と生活意識——ベルリン市外国人応答官が実施した社会調査結果の解釈」地誌研年報13号、2004年3月、53頁～61頁。

³⁵ ハリメ・カラデミルリ氏とのインタビュー（2018年9月10日）。

の属会員数は約180名で、ハリメ氏が理念として掲げるように「音楽は世界の言語」で「子供たちの教育」に力を注ぐことを目的としている。彼女は、次のようにトルコ系移民の子供たちを取り巻く現況を説明する。

「ここでは子供の頃から『あなたは他人』、『あなたはドイツ人ではない』、『あなたはもともとトルコ人』と言われます。これは辛い（アジュ aci）ことです。そしてまた、こうした子供たちがトルコに行けば、今度は『お前はドイツ人だ』と言われます。子供達はどこに属しているんでしょう。（略）こういうことが小さい頃から始まっているのです。そして後に子供たちは言うようになるのです。自分たちの祖国がある、ならばトルコ人のように振る舞おう、自分たちのルーツはトルコなのだから、と。こういうことを新しい世代が言っているのです。ドイツの国籍を得ることはできます。ドイツ人にはなれます。でも自分たちの祖国はトルコなのです」³⁶

三人の子を育てた母親としてハリメ氏の、移民第三、第四世代の子供たちの「ドイツとトルコの境界に立つ」現実を見てきたがゆえの言葉と言える。2001年から制度上ではドイツ国籍の取得が可能になり³⁷、統計上ではドイツ国籍取得者が増えたが、根本的な問題は制度では簡単に解決できない深いところにあることがわかる。彼女にとっては「音楽は世界の言語」で「音楽があれば、どこに行っても何でもできる」からこそ、子供たちを中心とした音楽学校の開設が目指されたことが理解される。

教育内容

同コンセルヴァトワールは、「トルコ音楽のための」と冠されているが、大きく三つのジャンルの音楽教育がおこなわれている。すなわち、伝統的なトルコ音楽（民俗音楽およびオスマン音楽）、トルコ民族舞踊、そして西洋音楽（ピアノ、ヴァイオリンなど）である。それぞれの授業は一週間に一回授業があり、授業料は一か月50ユーロ（2018年9月現在）となっている。上記に加え、読譜やソルフェージュの授業も開講されている。

音楽実践

上記開講授業のうち、トルコ民俗音楽（バーラマの個人レッスン）およびトルコ民俗音楽合唱の参与観察をおこなった。両授業ともに教師は、バーラマ奏者であるハサン氏であった。ハサン氏はイスタンブル音楽院（バーラマ専攻）を卒業し、コジャエツリ音楽院で教鞭をとっていたものの、七か月前にドイツを訪れ、現在、同コンセルヴァトワールのトルコ民俗音楽の教師としてバーラマのクラスとトルコ民俗音楽合唱のクラスを担当している³⁸。

実際のバーラマの個人レッスン（2018年9月11日）は下記のような流れでおこなわれた。

³⁶ 同氏インタビュー（2018年9月10日）。

³⁷ 2001年に発効した改定外国人法によって、青年と壮老年の間にドイツ国籍取得要件の差を設けるという方式が撤廃され、滞在許可あるいは滞在権利を保持する者が8年間合法的に継続滞在していれば国籍の取得を申請できる方式に改められた。山本、前掲書、56頁。

³⁸ ハサン・ブラクブルト氏とのインタビュー（2018年9月11日）

生徒は12歳ほどの女児で、バーラマは初心者レベルで、授業はすべてトルコ語で進められた。

- 16時30分 調弦から開始
- 16時35分 五線譜を使って解説
- 16時40分 バーラマの持ち方、構え方の指導
- 16時50分 「ミーファ」の音を繰り返し練習
右手のピッキングと左手の棹の勘所の位置を確認していく
- 17時 生徒が右手のピッキングを見ようとすると、「左手をみなさい」と指導が入る
- 17時05分 「ファ」の練習
- 17時10分 「ドーレ」の練習
「ド」は左手の親指を内側に曲げて弦を押さえて音を出す
「ドーレーミーファ」の四つの音を歌いながら合わせ、演奏する
- 17時20分 教師が黒板に書いた「ドーレーミーファ」の練習問題を、生徒が五線譜に書き映す（生徒から「疲れた」との声が上がる）
- 17時25分 楽譜を書き写し終わると、もう一度復習のため演奏
- 17時30分 授業終了

およそ一時間の授業は、基本的に右手のピッキングと左手の弦の押さえ方の指導に終始したが、とくに特徴的であったことは、ハサン氏が黒板の五線譜にリズム型を書き入れ、それを生徒に写させ、これを見ながら練習するように促していた点である。楽譜を基盤としたバーラマの指導を目指していることが明確に伝わる授業であった。続く二人目のバーラマの個人レッスン（男子学生、17時30分～18時30分）も、ほぼ同じ形で進められた。

もう一つのトルコ民俗音楽合唱の授業も興味深い展開をもつものであった（9月12日）。指導者は同じくハサン氏であった。授業時間は19時開始、21時終了の二時間ということであったが、実際は前半一時間は読譜（五線譜の読み方）の授業、後半一時間が民俗合唱という内容であった。読譜の授業は、参加者は7名、全員が40代以上の女性と男性であった。配られた民謡譜は、簡素な規範的楽譜ではあるが、16分音符や32分音符の細かな節回し書き込まれており、五線譜に慣れていない多くの参加者にとって「ド、レ、ミ」で読み進めることは難しいように見受けられた。ここでもハサン氏は、五線譜に記載された音価の厳密な再現を求め、指導をおこなっていった。

20時からトルコ民俗音楽合唱の授業がはじまると、ハサン氏はバーラマを奏でながら、指導を開始した。参加者は12名に増え、前半の読譜の授業で読み込んだ民謡を全員でトルコ語の歌詞をつけて斉唱で歌っていく。この時も、参加者から節回しのやり方について質問が出たが、教師は五線譜を参照し、「楽譜にはこう書かれている」として指導をおこなっていった。授業の最後には、これまでの授業で歌ってきた民謡曲を5曲ほど全員でうたい21時を少し過ぎて終了した。ただし終了する前に、参加者の一人からハサン氏に対し、読譜の授業が大変で疲れる、その後に新たな民謡を歌うことも疲れる、やり方を変えてほしい、との意見が出された。

以上、バーラマとトルコ民俗音楽合唱の授業の両方をみてきたが、まず気づかされることは、五線譜へ比重が「極端に」大きいということであった。これまで筆者は、トルコにおいてデルネッキや音楽アカデミーなどでトルコ民俗音楽合唱の授業に参加してきたが、確かに楽譜は全員に配られたものの、それはあくまで参考程度であり、ほとんどの参加者は五線譜が読めず、歌詞のみを参照して歌っていた。教師も五線譜に頼ることはほとんどなく、厳密な音価を求めることは決してなかった。それは民俗音楽が口頭伝承の「可変的」な音楽であると同時に、先述した地方様式を逸脱しなければ「正統性」が担保され得る音楽でもあるからだ。しかし今回、同コンセルヴァトワールで展開されていたのは、民俗音楽の典拠を楽譜そのものに求めるものであった。その構図は、西洋音楽の読譜と変わらないもので、その戸惑いが、最後の参加者の一人からの訴えに集約されているとみることができる。勿論、このような教授形態が、ドイツにおけるトルコ民俗音楽の一般的な形なのか、あるいは音楽教師一人の判断によるものなのか結論を急ぐことはできないが、少なくとも、「口頭伝承としてのトルコ民俗音楽」という性質が弱められていたことに違いはない。

3-3 サズ・エヴィ

ベルリンにおけるもう一つの音楽組織、サズ・エヴィでの音楽実践についても概観しておきたい。なおサズ・エヴィとは「サズの家」を意味し、「音楽教育センターおよびバーラマ学校」との説明が同組織のパンフレットには付されている。サズ・エヴィは2005年にアリ氏（現代表）によって設立され、現在、約70名の会員が所属している。

教育内容

サズ・エヴィは、基本的にトルコ民俗音楽の教授（バーラマとトルコ民俗音楽合唱）に特化した私立の組織である。バーラマのクラスはグループ（7～10名）に分かれ教授がおこなわれる。一週間にグループレッスンが2時間で、一か月の授業料は60ユーロ（2018年9月現在）となる。教員は3名から成り、代表であるアリ氏もバーラマおよびトルコ民俗音楽合唱の教師として指導にあたっている。ただし本人は大学等で専門的な音楽教育を受けた訳ではない。授業は楽譜の読み方からマカーム（旋法体系）などについても体系的に教えるものも含まれるという。

また教育とは直接かわらないが、同組織の特徴として、バーラマなどサズ全般の販売をおこなっていることも特筆すべきことであろう。アリ氏によれば、ベルリンにはバーラマの製作工房がないため、買い付けはイスタンブルでおこない、一つ一つ品質をチェックした上で空輸でベルリンに輸送するという³⁹。実際、同組織のパンフレットには、次のような説明文が付されている。

ベルリンのサズ・エヴィは、ドイツの首都で、トルコ民俗音楽に心を奪われた、そしてトルコ民俗楽器に興味をもつすべての人々へ、高品質の楽器を得る機会を提供するため；子供たちに、若者たちに、大人たちに、トルコ民俗音楽を愛好してもらうために、

³⁹ アリ・ルザ・テュルク氏とのインタビュー（2018年9月8日）

そして学んでもらうために2005年に設立されました。⁴⁰

上記の設立目的のまず第一が、「高品質の楽器を得る機会を提供するため」とあることからわかるとおり、サズ・エヴィの運営体制そのものが、楽器販売と教育が一体となった形で進められていることが理解される。

音楽実践

トルコ民俗音楽の授業のうち、トルコ民俗音楽合唱に参加観察をおこなった（2018年9月11日）。授業は19時から開始され、終了時刻は21時で二時間におよぶものであった。なお民俗音楽合唱団は、週に二時間のレッスンが開講される。この日参加していたのは男性7名、女性11名の計18名であった。そのうち、男性1名はドイツ人であった。

指導は、同組織の代表者であるアリ氏によっておこなわれた。まず、アリ氏より声帯の使い方が、「科学的」観点から説明され、1時間以上、全員がアリ氏の講義をきき、煙草の悪影響や水分の正しい取り方について知識を共有した。20時15分から、ようやく声出しが開始されたが、全員が「ラ」の音のみをうたうもので、そこで指導されたのが、正しい呼吸法による発声方法であった。全員の「ラ」の音が合うまで繰り返し声を出し、そこで意識されたのは腹式呼吸による無駄のない音声であった。アリ氏は黒板に「1. 呼吸（息）、2. 声、3. 音楽、教育」との文字を記し、「3. 音楽、教育」に進む手前の「1. 呼吸」と「2. 声」の重要さを、一緒に声を出しながら説明していった。トルコ民俗音楽合唱の授業であったが、トルコ民謡は一曲も歌わないまま授業は21時を少し過ぎて終了した。

この民俗音楽合唱で目指されていたことは、明らかに「美しい声」での合唱である。その「美しい声」とは、いわゆる西洋音楽でいうところの「全員が同じ高さ、同じテクスチャーの声」での合唱と言い換えてもよいだろう。そしてこのような指導を、筆者はトルコの民俗音楽合唱で受けたことがなかった。トルコにおいて民俗音楽合唱は、合唱を「楽しむ」というよりもむしろ、レパートリーを獲得するための一つの手段としての位置づけられている側面が強い。「合唱」という形態そのものが「没個性」や標準化をア priori に求めるものであるため、民謡の個々人によって異なる細かな節回しや細部のデリケートな表現は、「合唱」というスタイルの中では塗りつぶされてしまうのである。それゆえトルコ人は口々に、「民謡は独唱で楽しむもの」と言い、トルコ民俗音楽合唱という形態そのものに独唱と同じレベルでの「美しさ」を期待することはほとんどない。しかしこのサズ・エヴィで試みられていることとは、西洋音楽のベルカント唱法をも意識した「声づくり」であり、トルコ民謡の伝統的な在り様と異なるバクトルでのトルコ民俗音楽合唱の「美しさ」の追求が試みられていると言ってよいだろう。

4. 考察と今後の課題

以上、三つの組織での音楽実態について概要を述べてきたが、とくにトルコ音楽のためのコンセルヴァトワールおよびサズ・エヴィで顕著であったのは、トルコ民俗音楽の教授が、

⁴⁰ Berlin Saz Evi パンフレット（同組織で入手、B5版、両面印刷一枚）

西洋音楽（およびその教授法）を露骨なまでに意識した音楽教師側の個々の「選択」によって成立する傾向があるということである。五線譜に記された音符を厳格に再現したり、ベルカント唱法を意識した発声法を教授しながらこの音楽を教える光景は、トルコではまず見られない景観であった。

先述したようにトルコにおいて民俗音楽は、「アーウズ」と呼ばれる地方歌唱スタイルと、バーラマの「タウル」と呼ばれる奏法が地方様式として教えられ、これらはメタ的な認知として個々の地の風景や香り、感情と強力に結びつきトルコの人々に共有されてきている。しかし考えれば、トルコ系移民の二世や三世、あるいは四世代は、アーウズやタウルに付随するこうした感覚を共有しているとは言い難い。現に、トルコ音楽のためのコンセルヴァトワールでバーラマの教師をしているハサン氏も、「彼らにタウルを教えることがもっとも難しい。どのように説明すればよいかわからない」⁴¹と告白している。このような観点から言えば、ドイツにおけるトルコ民俗音楽の教授は、個々の教師のいわば裁量や選択に任される部分が大きくなり、ここにこそ教え手の側の葛藤や試行錯誤があることがみえてくる。

今後は、「アーウズ／タウル」をめぐるこれらの問いを「教え手⇔受け手」間の交渉の中で検証し、その上で外的要件（音楽組織、楽器などの物理的制約、トルコ・コミュニティ、ドイツ社会）を加味することで、トルコ系移民の音楽伝承の在り様をトータルな観点から検討することが求められるといえる。

トルコ民俗音楽は口頭で伝承されてきたがゆえに、常に「変形」をとまなうものである。しかし一方で、極端な西洋化は、民俗音楽の「アーウズ／タウル」にかかわる「正統性」の議論に深い亀裂を生み出す可能性をはらむ。ドイツにおけるトルコ系移民の人々の間のトルコ音楽の伝承は、「ドイツ／トルコ」という相克とともに、「トルコ／トルコ」の相克の問題でもあるのである。

【付記】本報告は、科学研究費・挑戦的萌芽研究（2016～18年度）、研究課題名：「ドイツにおけるトルコ系移民の音楽とその伝承」（課題番号：16K13163）の成果の一部である。

引用文献・参考文献

新井政美『トルコ近代史』 東京：みすず書房、2001年。

石川真作『ドイツ在住トルコ移民の文化と地域社会』 東京：立教大学出版会、2012年。

Abadan, Nermin. *Batı Almanya'daki Türk İşçileri*, Ankara: T. C. Başbakanlık Devlet Planlama Teşkilatı, 1964.

Avcı, Gamze. "Comparing Integration Policies and Outcomes: Turks in the Netherlands and Germany," in *Turkish Immigrants in the European Union*, edited by Refik Erzan and Kemal Kirişçi, Routledge, 2009. PP. 63-80.

Bates, Eliot. *Music in Turkey*, Oxford: Oxford University Press, 2011.

Greve, Martin. *Almanya'daki "Hayali Türkiye"nin Müziği*, (Originally published: *Die Musik der Imaginären Türkei: Musik und Musikleben im Kontext der Migration aus der Türkei in Deutschland*, Stuttgart: Verlag J. B. Metzler, 2003), İstanbul: Bilgi Üniversitesi Yayınları, 2006.

濱崎友絵「トルコにおけるアラベスクの誕生と展開」信州大学人文科学論集第2号、平成27年3

⁴¹ ハサン・ブラクブルト氏とのインタビュー（2018年9月11日）

月, 9～29頁。

Korkmaz, Mehmet Aktif. “Almanya'da Bir Aşık Kayserili Metin Türköz,” in *Şehir şehrin Yüzleri*, 2018, p. 82.
川島慶史「引き裂かれる私——多極化する移民社会」内藤正典編『トルコから世界へ』明石書店,
1998年, 283～303頁。

Stokes, Martin. “The media and reform: The saz and elektrosaz in urban Turkish folk music,” in *British Journal of Ethnomusicology*, vol. 1., 1992, pp. 89–102.

Radikal 新聞 (2006年6月8日付記事)。

山本健児「ベルリン在住トルコ人の日常生活と生活意識——ベルリン市外国人応答官が実施した社会調査結果の解釈」地誌研年報13号, 2004年3月, 53頁～61頁。

八木麻里「トルコのEU加盟はなぜ実現しないのか」内藤正典編『トルコから世界へ』明石書店,
1998年, 173～201頁。

インタビュー

スプヒ・ソルマズ氏とのインタビュー (2017年10月30日)

アリ・ルザ・テュルク氏とのインタビュー (2018年9月8日)

ハリメ・カラデミルリ氏とのインタビュー (2018年9月10日)

ハサン・ブラクブルト氏とのインタビュー (2018年9月11日)

インターネット他

<https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/GesellschaftStaat/Bevoelkerung/Bevoelkerung.html> (2018年10月31日閲覧)

<https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/GesellschaftStaat/Bevoelkerung/MigrationIntegration/MigrationIntegration.html> (2018年10月31日閲覧)

<https://www.statistik-berlin-brandenburg.de/Statistiken/inhalt-statistiken.asp> (2018年10月31日閲覧)

Berlin Saz Evi パンフレット (同組織で入手, B5版, 両面印刷一枚)

(2018年10月31日受理, 12月4日掲載承認)